

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 6年 9月 4日

氏名 藤本茉莉恵

所属 教育心理学 コース

指導教員名 植阪 友理

1. 研究課題 クラシック演奏者の楽譜の解釈における自律性—教育的要因と自己調整学習・ウェルビーイングへの影響の検討—
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6年 3月 15日 ~ 令和 6年 7月 2日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	①
<p>Fujimoto, M., & Uesaka, Y. (2024). Autonomous or controlled interpreters? Model of <i>Werktreue</i> internalization for classical musicians. <i>Frontiers in Psychology</i>, <i>15</i>, 1401278. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2024.1401278</p> <p>・論文の概要 クラシック音楽の器楽演奏において、自律的に学習を進める難しさが指摘されている。例えば、音楽大学の学生がレッスンを受動的に受け、練習を非効率的に行い、本番では思い通りに演奏できなくてもその振り返りを行えない、といったことが明らかにされている(e.g., McPherson et al., 2019)。しかし、なぜ自律的学習が妨げられているのかは明らかにされていない。そこで本研究は、自律的学習に寄与する一要因として解釈における自律性(以下、解釈的自律性)に着目をした。</p> <p>まず、楽譜の解釈を自律的に発展させることが学習者の自律的学習行動やウェルビーイングに寄与することを示す先行研究を紹介した。その上で、音楽学の知見に基づき、演奏家は「作曲家の意図に忠実」に解釈をするべき(<i>Werktreue</i>)という業界の規範が、どのように演奏者の解釈や演奏を制約してきたのかを述べた。そして、現在においても、解釈が作曲家の意図に忠実であるかどうかは演奏の判断基準の基盤になっているものの、「忠実」な解釈の認識が演奏家によって異なり、解釈方法にも影響していることを示した。</p> <p>以上から、先行研究では解釈における自律性(以下、解釈的自律性)の定義、学習やウェルビーイングへの影響、そして教育的要因が明らかにされていないという現状を示した。そして、自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)を用いて、先行研究の限界点を克服する『「作曲家の意図に忠実」の内在化モデル』“Model of <i>Werktreue</i> Internalization”を提案した。自己決定理論によると、人は3つの基本的心理欲求(有能感、自律性、関係性への欲求)を持っており、自律的な活動とウェルビーイングにはこれらの心理欲求の充足が不可欠であるという(Deci & Ryan, 2000)。これを適用し、解釈において基本的心理欲求を阻害される体験をした学習者は解釈的自律性が阻害され、学習とウェルビーイングが妨げられること、そして、基本的心理欲求が満たされた学習者は解釈的自律性が促進され、適応的な学習やウェルビーイングの向上に繋がることを示した。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

1. 学術活動による成果

・投稿先のジャーナルについて

Frontiers in Psychologyはオープンアクセスの国際学会誌である(インパクトファクター:2.6)。この学会誌に一本目の論文を掲載することで、音楽教育学、音楽心理学、そしてパフォーマンス科学の研究者らの国際的コミュニティに申請者の研究を発信することができた。

・査読プロセスについて

3月15日に原稿を投稿し、2人の査読者から“Minor revision is required”と“Accept in current form”という評価を得て、一度の修正を経て6月12日にアクセプトされ、7月2日に本論文が掲載された。

・掲載後の成果について

本論文を掲載した後、音楽教育学の第一人者であるProf. Gary McPhersonから、“I enjoyed reading this article very much and believe it to be one of the very best pieces of scholarship that I have read over recent years.”とコメントをもらった。また、Johns Hopkins Universityのポスドク生のDr. Raluca Mateiからは、ルーマニアの音楽大学で講演する際に本論文を学生に紹介した、との連絡をもらい、少なからず反響を得ることができた。また、8月に参加した国際音楽教育学会では査読者の一人であるProf. Diana Blomに会い、論文の中身についてディスカッションをすることができた。7月末から8月中旬に参加した国際音楽教育学会でも本論文を紹介し、9月1日現在、本論文のダウンロード数は157件である。

2. 学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果

本論文で提案したモデル(“Model of *Werktreue* Internalization”)は、修士課程で行なった質的研究を分析する上での重要なフレームワークである。この理論論文が国際学術誌に先立って掲載されることで、そのモデルに基づく更なる実証研究の執筆・掲載に繋がることが期待される。